

# 寺院縁起発掘

守屋俊彦

一

日本靈異記上巻第五縁は大部屋栖野古の顕彰譚である。三段から成っているが、第一段が顕彰譚的な色合がもっとも強い。屋栖野古が、仏教伝来当初における崇仏と排仏の争いの中で、仏像を守り抜いたという話である。ところが、この話には、その前に、さらにその仏像についての靈異譚が付いている。

敏達天皇の代、和泉の国の海中に樂器の音声あり、笛箏琴篋篋等の声の如く、或るは雷の振動するが如し。昼は鳴り、夜は耀き、東を指して流る。大部屋栖古の連の公聞きて奏す。天皇嘿然りて信じたまはず。更に皇后に奏すに聞きて、連の公に詔りたまはく「汝往きて看よ」とのたまふ。詔を奉りて往き看るに、実に聞きしが如く、霹靂に当りて楠あり。還り上りて奏さく「高脚の浜に詣りつ。今屋栖、伏して願はくは仏像を造るべし」とまをす。皇后詔りたまはく「願ふ所に依るべし」とのたまふ。連の公、詔を奉りて大く喜び、嶋の大臣に告げて詔命を伝ふ。大臣もまた喜び、池辺直氷田を請けて仏を雕り、菩薩三軀の像を造り、豊浦の堂に居きて、諸人仰敬す。

この話の底には雷神や漂着神の固有信仰があつて、それなりに興味深いのであるが、話そのものは欽明紀十四年の条の、

夏五月、戊辰の朔の日、河内の国言さく、「泉の郡の茅渟の海の中に梵音あり、震響雷の声の若く、光彩晃り耀くこと日の色の如し」とまをしき。天皇、心に異みたまひて、溝辺直ここにただ直と曰ひて名字を問はず。蓋し伝へ写して誤り失へるなり。をして海に入りて求訪めしめたまひき。この月、溝辺直、海に入りて果して樟の木の海に浮きて玲瓏くを見、遂に取りて献りしかば、天皇、画工に命せて仏の像二軀を造らしめたまひき。今吉野の寺に光を放てる樟の像なり。

という話と内容的には殆ど同じものである。ところで、この欽明紀十四年の話は、すでに五来重博士が述べていられるように、吉野寺(比蘇寺)の縁起譚だったのである。すれば、この話も本来は吉野寺の縁起譚だったということになる。第一段の終りに、「今吉野の比蘇寺に安置きて光を放つ阿弥陀の像これなり。」とあるのが、このことをよく証しているといえよう。つまり、この第一段は、吉野寺の縁起譚と仏教伝来当初の崇仏と排仏の争いの話とを、屋栖野古を主人公とすることによって、一つに結び付けて作られていると

いうことになるのである。

もっとも、その仏教伝来当初の崇仏と排仏の争いの話にしても、これを仏像に視点を置いてみれば、仏像受難譚ともいえよう。<sup>(2)</sup>

日本霊異記には、仏像が盗まれたとか壊されたとか捨てられたとか、いう仏像受難譚が数多くみられる。仏像が難を受けるといふことは、仏像への関心と同情とを誘い、そこから逆に仏像への信仰心を強めることになる。それとともに、その仏像を蔵めた寺への信頼を高め、従って、仏像受難譚がその寺の縁起譚にもなってくるのである。すれば、

然るに物部弓削守屋の大連の公、皇后に奏して曰はく「およそ仏の像は国内に置くべからず。なほ遠く退けむ」といふ。皇后聞きて屋栖古の連の公に詔りたまはく「疾くこの仏の像を隠せ」とのたまふ。連の公、詔を奉り、氷田の直をして稻の中に蔵さしむ。弓削の大連の公、火を放ちて道場を焼き、仏の像を将ちて難破の堀江に流す。屋栖古に徴りて言はく「今国家災を起すは隣国の客神の像を国内に置くに依る。この客神の像を出すべし。速忽に豊国に棄て流さむ」といふ。客神は仏の神像なり。固辞びて出さず。

という、崇仏と排仏の争いの中での屋栖野公の功績譚も、本来は吉野寺の仏像の受難譚であり、従って、吉野寺の縁起譚であったともみられるのである。つまり、第一段は、仏像の霊異譚から始まって、終りに至るまで、一貫して吉野寺の縁起譚だったということになるのである。それを、屋栖野公を主人公とすることによって変容し、大伴氏の本記(家伝)としたのであろう。<sup>(3)</sup> 何れにしても、日本霊異記上巻第五縁の第一段には、吉野寺の縁起譚が埋まっているということになるのである。

武田祐吉博士は、古事記の物語の中に神社本縁が入っていることを、かつて指摘されたことがある。例えば、天照大神と須佐之男命との誓約の段の終りに、

故、その先に生れし神、多紀理毘売命は、胸形の奥津宮に坐す。次に市寸島比売命は、胸形の中津宮に坐す。次に田寸津比売命は、胸形の辺津宮に坐す。この三柱の神は、胸形君等のもち拝く三前の大神なり。

とあるところから、そこに宗像神社の本縁が入っている、とされたがときである。こうして、武田博士は、上巻にこの宗像神社など十五社、中巻に石上神宮など五社、下巻に一言主神社一社、の神社本縁が入っていることを指摘されたのである。<sup>(4)</sup>

このように、神や神と人との交渉などを描いた古事記の中に神社本縁があるとすれば、仏の教えを説いた日本霊異記の中に寺院縁起があっても不思議はないのである。すれば、日本霊異記には、この吉野寺の縁起譚の外に、なお多くの寺院縁起が埋まっていることが十分に考えられるのである。

## 二

そこで、こうした予想の下に、日本霊異記の中から、寺院縁起と思われるものを掘り出してみたい。便宜上、寺を官寺と私寺とに分け、官寺では、主として南都七大寺といわれる寺についてあたってみたい。なお、ここでいう寺院縁起とは、寺の草創や沿革、仏の霊験などを言い伝えた話<sup>(5)</sup>、というぐらいついて置くことにする。

その南都七大寺では、大安寺の縁起譚とみられる二話が、まずは目につくのである。上三十二と中二十八の話である。何れもこの寺

にあった丈六の仏の靈験に関するものである。上三十二はこのような話である。聖武天皇が添の上の郡の山村で狩りをされた。一匹の鹿が細見の里の百姓の家に逃げ込んだ。そのことを知らなかった家人が殺して食べてしまった。そこで男女十余人が逮捕され授刀寮に監禁された。しかし、その時皇子が誕生されたために、大赦が行われ、罰を免かれたというのである。こういう筋の話なのであるが、この人々は、大安寺の丈六の仏が人の願をかなえてくださるということを保ち、監禁される前に、

我等、官に参る向かはむに、寺の南の門を開きて親拝することを  
得しめよ。更に請はくは、我等、闕に詣らむとする間に及びて、  
鐘の声を従はしめむと欲ふ。

と願ったという。皇子の誕生は偶然のことであるが、その偶然の背後に、丈六の仏の靈験が働いていることを暗示する構成になっている。最後を、「誠に知る、丈六の威光、誦經の功德なることを。」と結んでいるのが、このことを端的に語っているといえよう。

この丈六の仏の靈験をもっとはつきりとみせつけているのが、中二十八の話である。貧しい女が、この仏の靈験によって、富める者になったというのである。この女も、あの細身の里の人々のように、この丈六の仏が「衆生の願ふ所を急に能く施し賜ふ」と聞いて、「我に宝を施して窮愁を免れしめよ」と何日も願っていたところ、ある朝錢四貫が門の所に置いてあり、それには「大安寺の大修多羅供の錢」という札が付いていた。女は恐れて錢を寺に返すのだが、この後同じようなことが二回も起き、結局は、

ここに六宗の学頭の僧等、集ひ会して怪み、女人に問ひて曰はく  
「汝何の行をか為る」といふ。答へて曰はく「為す所無し。ただ

貧窮にして命を存ふに便無く、帰すること無く、怙むこと無きに依りての故に、我、この寺の釈迦の丈六の仏に花香燈を献じ、福分を願ひつるのみ」といふ。衆僧聞きて、商量りて言はく「これ仏の賜へる錢なるが故に、我藏めずして女人に返し賜はらむ」といふ。

というような処置が取られることになった。衆僧が「これ仏の賜へる錢」といっているように、この錢四貫は、丈六の仏が賜わったものだったのである。上三十二のように、仏の靈験が暗示的に述べられているのではなく、ここには直接的に語られている。

何れにしても、この二話は大安寺の縁起譚であつたと思われるのだが、実は、大安寺には、別に大安寺伽藍縁起併流記資財帳というものがある。天平十九年に成つたとされている。そこには、

初飛鳥岡基宮御宇天皇之未<sub>レ</sub>登<sub>二</sub>極位<sub>一</sub>。号曰<sub>二</sub>田村皇子<sub>一</sub>。是時小治田宮御宇太帝天皇召<sub>二</sub>田村皇子<sub>一</sub>。以遣<sub>二</sub>飽浪葦牆宮<sub>一</sub>。命問<sub>二</sub>厩戸皇子之病<sub>一</sub>。勅。病状如何。思欲事在耶。樂求事在耶。復命。蒙<sub>二</sub>天皇之頼<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>樂思事<sub>一</sub>。唯臣伊。能擬村。始在<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>。仰願奉<sub>二</sub>為於古御世々々御宇帝皇。将来御世々々御宇帝皇<sub>一</sub>。此道場<sub>平</sub>欲<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>大寺<sub>一</sub>。營造<sub>上</sub>。伏願此之一願。恐朝廷讓献止奏支。天皇受賜已訖。というような、この寺の草創からはじまって、聖武天皇の御代に至るまでの寺の沿革が、歴代の天皇との関係を通して語られている。これを日本靈異記のこの二話と比べてみると、ひどく相違している。靈験譚は殆ど語られていない。この丈六の仏についても、「爾後藤原朝廷御宇天皇九重塔立。金堂作建。併丈六像敬奉<sub>レ</sub>造之。」とあるのみである。これはどちらが正伝というようなものではなく、二通りの縁起譚があつたのであろう。大安寺伽藍縁起は、流記資財

帳——寺の財産目録が付いているところからすると、いわば朝廷に提出した公文書的なものであり、従って、寺側からいえば寺格をあげてもらいたいというような意図もあった訳で、そこから寺と天皇との関係が主として語られることになったのであろう。しかし、民衆に語る場合には、寺の沿革や天皇との関係などはそれ程必要はないのである。民衆にとってもっとも関心のあることは、銭が手に入る、罰を免れる、というようなもつと身近なことなのである。そこから、この二話のような靈験譚も作られたのであろう。古代の寺院縁起には、公的と私的、朝廷向けと民衆向け、の二通りの縁起譚があったとみて置いてもよいのではないだろうか。

次は東大寺であるが、東大寺そのものについての縁起譚はなく、その前身である金熟寺についてのものがある。中二十一の、  
 諾楽の京の東の山一つの寺あり。号けて金熟と曰ふ。金熟優婆塞、この山寺に住するが故に、字とす。今東大寺と成る。いまだ大寺を造らざりし時、聖武天皇の御世に、金熟行者、常に住して道を修す。その山寺に一つの執金剛神の孺像を居く。行者、神王の躰に繩を繫けて引き、願ひて昼夜に憩まず。時に躰より光を放ち、皇殿に至る。天皇驚き怪みたまひ、使を遣して看しむ。勅信、光を尋ねて寺に至り、見れば一の優婆塞あり、その神の躰に繫けたる繩を引き、礼仏悔過す。信、視て遡く還り、状を奏す。行者を召して、詔り給はく「何事をか求めむと欲ふ」とのたまふ。答へて曰はく「出家して仏法を修学せむことを欲ふ」とまをす。勅して得度を許したまひ、金熟を名とす。その行を誉めて、四事を供し、乏しき時無し。世の人その行を美め称へて、金熟菩薩と称ふ。その光を放ちし執金剛神の像、今東大寺の絹索堂

の北の戸に立てり。

というものである。仏像の躰から光を放ち、それが天皇の宮殿に達した、というような神秘的な面もあるが、つまりは、金熟寺の建立の由来が語られているのだから、この寺の縁起譚とみて置いてよいだろう。それも、天皇との関係を通してだから、公的なものである。大安寺伽藍縁起で、大安寺の前身である熊凝精舎の建立の由来が語られているところからすれば、これも東大寺伽藍縁起の一部であったのかもわからない<sup>(6)</sup>。

西大寺については、縁起譚らしいものはみ当たらない。ただ、下三十六に、藤原朝臣永手がこの寺の塔の高さを七層から五層に減じたために、地獄に落ちたという話がある。仏罰を語ったもので、靈験譚とはやや異なるが、仏の威力を示したという点からすれば、靈験を語っていることにもなり、従って、この寺の縁起譚とみられないこともない。興福寺には、それらしい話が一話ある。上六の、この寺にいた行善という僧にまつわる、観音の靈験譚である。元興寺の場合、飛鳥元興寺の縁起譚とみられるものが一話ある。上三である。この上三は、道場法師の誕生から元興寺の優婆塞になるまでの奇異の数々を語ったものであるが、その第三段は、この寺に出没する鬼を退治した話になっている。その終りに、「その鬼の頭髮は今元興寺に在りて宝とす。」とあって、寺宝の由来を語る形式になっているので、この段には元興寺の縁起譚が入っているものとみて置いてもよいだろう<sup>(8)</sup>。法隆寺のものはない。

最後に、景戒がいた薬師寺についてみてみたい。景戒がいたというのに、意外にも一話しかない。下十二の千手観音の靈験譚である。

奈良の京の薬師寺の東の辺の里に盲人あり。二つの眼精盲ひたり。観音に帰敬し、日摩尼手を称念して、眼の闇を明かさむとす。昼は薬師寺の正東の門に坐し、布巾を披き敷きて、日摩尼手を称礼す。往来の人、見哀む者、錢米穀物を、巾の上に施し置く。或るは巷陌に坐して、称礼すること上の如し。日中の時、鐘を打つ音を聞きて、その寺に参入りて、衆僧に就きて飯を乞ひ、命活ひて数年を経たり。帝姫阿部の天皇の代に至りて、知らざる二人、来りて云はく「汝を矜むが故に、我二人、汝の盲ひたる目を治めむ」といふ。左右各治めりて、語りて言はく「我二日を逐て、必この処に来らむ。ゆめ待ちて忘れざれ」といふ。その後久しからずして、倏に二つの眼開きて、平復すること故の如し。期りし日に当りて待つに、終にまた来らざりき。

目の見えない人が、観音の靈験によって、見えるようになったという話で、靈験譚としてはごく一般的なものである。しかし、医薬に恵まれない民衆にとっては、病が治るといふことは切実な願望なのだから、靈験譚としては強く訴えるものがあつたらう。一話ではあるが、天武天皇が皇后の病氣平癒のために建立された薬師寺にふさわしい縁起譚といえよう。いうまでもなく、民衆向けのものである。

三

次に私寺であるが、その中できわだっているのは、氏寺の縁起譚が幾つかあるということである。しかも、その氏寺が、中央の豪族ではなく、地方の豪族の寺であるところに特色がある。上七の三谷寺はその典型的なものである。

禅師弘濟は、百済の国の人なり。百済の乱る時に当りて、備後の三谷の郡の大領の先祖、百済を救はむが為に軍旅に遣さる。時に誓願を發して言はく「若し、平に還り来らば、諸神祇のために伽藍を造立せむ」といふ。遂に災難を免る。すなはち禅師を請けて、相共に還り来りて、三谷寺を作る。

終りが「三谷寺を作る」と結ばれているのだから、この話が三谷寺の縁起譚であることはまず間違あるまい。ただし、その三谷寺を作った大領の先祖の氏名が欠けている。一体、大領は地方の豪族がなる場合が多く、この先祖は三谷の郡に住み、その作った寺が三谷寺といわれているところからすれば、この地方の豪族である三谷氏とみるべきであろう。三谷寺は三谷氏の氏寺だったのである。<sup>(9)</sup>

ところで、この話は寺の建立の由来のみを語った簡単な筋のものであるが、実は、この後に靈験譚らしい話が長々と展開しているのである。禅師は寺の佛像を作るために、京に上り、金丹等を買う。ところが、その帰途海賊にあい、海中に投げ込まれる。しかし、次のような不思議なことが起きるのである。

水腰に及ぶ時、石の脚に当るをもて、その暁に見れば、亀の負へるなり。その備中の海浦海辺にその亀四つ領して去る。疑はくはこれ放てる亀の恩を報ずるか。時に賤等六人、その寺に金丹を売る。檀越まづ過ぎて価を量り、禅師後に出でて見る。賤等作然退進を知らず。禅師憐愍みて刑罰を加へず、仏を造り、塔を蔽りて、供養し了りぬ。

ここには二つのことが語られている。救った亀に助けられたということと、六人の海賊が奪った金丹等をもあろうに三谷寺に売りに行ったということである。この二つのこと、とくに後の方は、偶

然なことであるにしても、これまた仏の靈験のなせるわざである、という口ぶりがすぐその裏にみられるのである。しかも、終りが「仏を造り、塔を蔽りて、供養し了りぬ。」となつてゐるのだから、この部分もまた三谷寺の縁起譚とみて置いてよいだろう。

このようにみてみると、この話には二つの縁起譚があることとなる。寺の建立の由来を語ったものと、仏の靈験を語ったものである。これを先にあげた大安寺の場合に当てはめると、前者は、百済出兵に関連して建立の由来が語られているのだから、朝廷向けの公的なものであり、後者は、亀報恩譚などがとり入れられて仏の靈験が述べられているのだから、民衆向けの私的なものとみられるのである。つまり、この上七は、朝廷向けと民衆向けの、二つの縁起譚を結びつけて作られているといえるのである。そこから、前半と後半の結びつきがややぎこちなく、バランスの崩れたものになっているのであろう。

この上七と似たような内容の話が上十七にある。

伊予の国越知の郡の大領の先祖越智直、百済を救はむとするに当りて、遣されて軍に到りし時、唐兵に擒はれ、その唐国に至る。我が八人、同じく一つの洲に住む。儻として観音菩薩の像を得て信敬尊重す。八人同じ心に竊に松の木を截りて一つの舟を為り、聖像を請け奉りて舟の上に安置し、各誓願を立て、その観音を念ず。ここに西ふく風のまにまに直に筑紫に来る。朝廷聞し召して、事の状を問ふ。天皇忽に矜みて樂ふ所を申さしむ。ここに越智直言はく「郡を立てて仕へむと欲ふ」とまをす。天皇許可したまふ。然る後に郡を建て寺を造り、すなはちその像を置けり。その時より今の世に迄るまで、子孫相續ぎて帰敬す。

上七とは逆に寺名が欠けている。しかし、越智直が作ったのだから、その名称は越智寺であったとみて置いてよからう。しかも、「子孫相續ぎて帰敬す。」というのだから、越智氏の氏寺である。その建立の由来が語られているのだから、越智寺の縁起譚である。<sup>(10)</sup>

それも、上七の前半と同じように、百済出兵に関連して語られているので、公的なものである。なお、そこには「然る後に郡を建て」と建郡の事情まで併せ語られているのだから、上七よりも一層公的な色合が強くなつているといえよう。それだけに、靈験譚的なものは薄くなり、上七のように、横に並べるといふ方法をとらないで、建立の由来の中に取り込むという形になっているのであろう。

ところで、上七、上十七の二つの話をみて気付くことの一つは、寺の建立者が何れも大領の先祖になっていることである。つまり、この二話は、寺の縁起譚であるとともに、先祖の顕彰譚にもなつているのである。恐らくは始祖神話の形を踏襲したものであるであろう。始祖神話では、祖先の栄光と權威は、神との接統によって語られていたのである。それを仏によって語っているのである。一体、大領などの郡司クラスはしばしば造寺をしている。出雲国風土記をみると、楯縫の郡の大領出雲臣大田、出雲の郡の大領置部臣布禰、大原の郡の大領勝部君虫麻呂、などが寺を造っている。ところで、大領などの郡司クラスは、先に述べたように、その地方の豪族がなる場合が多かったのである。その郡司クラスがしばしば造寺したということとは、当時の仏教は国家仏教だったのだから、その仏教を受け入れるということは、朝廷への忠誠心を示すことになる。一方では、新しい文化の光でもある仏教を取り入れ、寺や仏像を造ることは、地方の民衆への權威の誇示にもなったからである

う。郡司クラスは地方における仏教受容者の中心的存在だったのである。<sup>(11)</sup>ところで、郡司クラスになることによって、律令体制の枠の中に組み入れられたこれら地方の豪族達は、神との接続を切断されることになったために、神を仏に切り替え、仏にかかわる造寺や造仏によって先祖を顕彰する話を作り伝えたのであろう。つまり、神社本縁が始祖神話にもなっている形をそのまま受け継いでいることになるのである。この二つの話が、何れも大領の先祖の話になっていること背景には、このような事情があったのではあるまいか。そこで、この二つの話ほどはっきりはしないが、氏寺の縁起譚と思われるものを今一つ挙げて置きたい。中三十一の話である。

丹生直弟上は、遠江の国磐田の郡の人なり。弟上、塔を作らむと願を発し、いまだその塔を造らずして、淹しき年を歴、なほ願を果さむことを嗜ひ、毎に懐に軫む。聖武天皇の御世、弟上年七十歳、妻年六十二歳にして、懐妊して女を生む。左の方の手を捲りて、産生る。父母怪みて、捲れる手を開くに、いやましに固く捲りて、なほ故に舒べず。父母愁へて曰はく「嫗、時にあらずして子を産み、根具はらず。これ大く恥しとす。因縁をもての故に、汝我が子に生まる」といふ。すなはち嫌ひ棄てずして、慈み哺み育つ。漸にして長大なるまにまに、面容端正しく、年七歳に至り、手を開きて母に示して曰はく「この物を見よ」といふ。因りて掌を瞻れば、舍利二粒あり。歡喜び異奇みて、諸人に告げ知らす。諸人衆、喜び展転ふ。国の司、郡の卿、悉に喜び、知識を引率して、七重の塔を建て、その舍利を安みして、供養したる。今磐田の郡の部内に建立せる磐田寺の塔これなり。塔を立つる後、その子忽に死にき。

この磐田寺は、郡名と同じ寺名を持っているので、三谷寺や越智寺の例からすれば、氏寺ということになる。丹生氏の氏寺であらう。<sup>(12)</sup>ただし、三谷寺や越智寺のように、氏族名と一致していないところにやや難点がある。だが、日本靈異記考証に、「和名抄郷名遠江ノ国磐田ノ郡壬生、爾生、蓋因<sup>三</sup>此ノ地<sup>二</sup>命<sup>一</sup>姓也」とあるのによれば、磐田郡に壬生という地名があり、何等かの理由によって、氏族名を、郡名ではなく、郡内の小地名によっていたことになる。ともかく、広と狭との差はあるにしても、氏族名が地名と同じという点からすれば、この障害は除かれることにならう。もっとも、全書本に「磐田郡見付町の国分寺のことであらう。」と注してあるように、国分寺だとすれば、官寺ということになる。何れてしても、ここには、仏舍利出現についての靈異が語られて居り、その仏舍利を蔵めた塔は、寺の信仰と莊嚴のシンボルの存在なのだから、きわめて神秘的な雰囲気の中で、寺の建立の由来が語られていることになるのである。

#### 四

最後に一般的な寺についてみてみたい。一般的な寺としては智識寺というのがある。智識寺は、氏族の枠をこえた広い範囲の信者によって発願され維持された寺をいうのである。<sup>(13)</sup>官寺や氏寺のように、国家の権力や氏族の結束によって支えられているのではなく、一人一人の信仰心によって支えられているのだから、その絆になっ

ている信仰心を常に保ち強める必要がある。そこから、仏の靈異が語られてくるのである。下五に、

河内の国安宿の郡の部内に、信天原の山寺あり。妙見菩薩に燃燈

を献ずる処たり。畿内、年毎に、燃燈を奉る。帝姫阿倍の天皇の代、智識例に依りて燃燈を菩薩に献じ、並びに室主に銭・財物を施す。その布施の銭の中五貫を師の弟子竊に盗みて隠す。後錢を取らむが為に、往きて見れば錢無し。ただ鹿、矢を負ひて仆れ死せり。仍りて鹿を荷はむが為に、河内の市の辺の井上寺の里に返り、人等を率て至り見れば、鹿にあらずしてただ錢五貫なり。因りて盗人を顕しき。

というのがあつた。盗まれた寺の銭が、鹿に姿を変え、その鹿を市に持って行つたら、もとの銭にかえり、ために銭も盗人も発見されたという話である。それは、この後に「菩薩の示せる所なることを。」と記してあるように、この寺の妙見菩薩の靈異によるものであつた。

これとよく似た話が上三十五にもある。盗まれた仏画が、生物に姿を変え、市で発見されたというものである。一人の尼が平群の山寺に住み、「四恩の奉為に、敬みて像を画き、その中に六道を図」し、その仏画を寺に安置していたところ、盗まれてしまった。尼が放生会を行うために、たまたま難波の市にでかけたところ、樹の上に背負い籠があり、その中から生物の声が出た。そして、

その尼等の曰はく「この篋の中に生物の声あり。吾、買はむと欲ふが故に、汝を待つのみ」といふ。篋の主対へて曰はく「生物にあらず」といふ。尼乞ひてなほ止まず。時に市人評りて曰はく「その篋を開くべし」といふ。篋の主因然れて、篋を捨てて奔走る。後開きて見るに像存せり。

というふうなことになる。仏画は無事発見され、「遂に本の寺に安き、道俗帰敬」したという。このような不思議なことによって仏

画が発見されたというのも、つまりは、仏のなせるわざだったのである。

この二つの話では、仏の靈異のみが語られていて、寺の建立の由来などは全く語られていない。官寺や氏寺の場合には、寺の格付けや権威のために、建立の由来を述べることが必要だったかも知れないが、智識寺にとっては、信仰心を保ち強めればよいのだから、仏の靈異を語るの方がより望ましかったということなのである。信仰心に支えられた智識寺にふさわしい縁起譚といえよう。

ところで、日本靈異記には、寺ではなく、堂というのが幾つかある。この堂は、村人やせいぜい一村程度の土豪によって建立された寺である。常住の専門僧侶も居らず、仏像も粗末であり、建物もごく簡単なものであつた。農民的な寺である。<sup>(14)</sup>智識寺と同じように、信仰心によって支えられているのであろうが、村人であるだけに、一層素朴な印象を受ける。この堂にも縁起譚がある。中二十六に、

禪師広達は、俗姓下毛野朝臣、上総の国武射の郡の人なり。一は云はく、群謀の郡の人なりといへり。聖武天皇の代、広達、吉野の金の峯に入り、樹下を經行して仏道を求む。時に吉野の郡の桃花の里に椅あり。椅の本に梨を伐りて引き置きて歳余を歴たり。同じ処に河あり、名を秋河と曰ふ。その引き置ける梨をこの河に度す。人畜俱に踐みて、度り往還す。広達、縁ありて里に出で、その椅を度りて往く。椅の下に音ありて曰はく「ああ痛く踏むことなかれ」といふ。禪師聞きて、怪み見るに人無し。良久に徘徊し、過ぐるにえ耐えず。椅に就きて起ち看れば、いまだ仏を造り了らずして棄てたる木なり。禪師、大く恐れ、淨処に引き置き、哀み哭き敬礼し、誓願を發して言はく「因縁あるが故に遇へり。我かな



らず造り奉らむ」といふ。有縁の処に請け、人に勧め物を集め、阿弥陀仏、弥勒仏、観音菩薩等の像を彫り造ること既に訖りぬ。今吉野の郡の越部の村の岡堂に居る置く。

とある。未完の仏像ではあるが、日本霊異記にしばしばみられる仏像が声をだしたという型の霊異譚である。仏像受難譚にもなっている。終りが「今吉野の郡の越部の村の岡堂に居る置く。」と、比蘇寺の場合と似たような結び方になっているので、岡堂の縁起譚なのであろう。

今一つ中十四の服部堂の場合をあげてみたい。この堂に祭られていた吉祥天女が食べ物をごくださったという話である。日本霊異記の中では珍らしい内容の話なので、記してみることにする。貧しい女王がいた。宴会を設けることができないので、吉祥天女に「願はくは我に財を賜へ」と願っていたところ、かつての乳母が、香りのよい食物や立派な食器を多くさん持ってきてくれ、素晴らしい宴会を設けることができた。ところが、この後、

悦の望に勝へずして、得たる衣裳を捧げて、乳母に着せ、然る後に堂に参り、尊像を拝せむとするに、乳母に着せたりし衣裳、その天女の像に被れり。疑みて往きて問ふに、乳母答ふらく「知らず」といふ。

というような不思議なことが起きた。つまり、この乳母は、女王の熱心な祈願に感応した吉祥天女の化身だったのである。食物をごくださるといふ、日常の生活的なことを素材にした霊異譚であるが、それだけに、村人の信仰心をかき立てるものがあつたのであろう。素朴な縁起譚である。

さて、このようにして、日本霊異記の中から、寺院縁起と思われる

るものを試みに掘りだしてみたのであるが、これらのものがすべて寺院縁起であるかどうかは、なお検討の余地があろう。なおいえば、日本霊異記には、これら以外にも、多くの寺院縁起があるに違いないのだから、一つ一つの話をもさらに詳しく分析してみる必要があろう。

古代の寺院縁起で現存しているものは、先にあげた大安寺伽藍縁起併流記資財帳と、元興寺伽藍縁起併流記資財帳、法隆寺伽藍縁起併流記資財帳、ぐらいのものであるとされている。しかし、寺がある以上、大なり小なり、何等かの形の縁起譚はあつたとみた方がよい。その多くは消え去ってしまったのであろうが、他の文献の中に埋もれているものもある筈である。従って、今の段階では、それらの縁起譚を発掘することが先決の作業である。その上で、寺院縁起の文学としての意味や、古代文学における位置などを考えるのが順序であらう。ただ、ここで一言だけ付け加えて置きたい。日本霊異記についていえば、その資料として、多くの寺院縁起が使用されているらしいということである。

注

- (1) 五来重博士 寺院縁起の世界(国文学 解釈と鑑賞)第四十七巻第三号 七頁
- (2) 丸山頭徳氏 日本霊異記大部屋栖野古説話をめぐって(「仏教文学」第六号) 四頁
- (3) 大伴氏の本記の中に、なぜ吉野寺の縁起譚がとり入れられているのか、ということにはさらに考えてみなければならぬ問題であらう。この縁起譚の底に雷神や漂着神の固有信仰があることともに、稿を改めて考えてみたい。
- (4) 武田祐吉博士 古事記説話の研究 三一九頁〜三三四頁
- (5) 桜井徳太郎氏 縁起の類型と展開(「日本思想大系 寺社縁起」所収) 四四九頁

- (6) 東大寺要録には「靈異記中巻云」として、縁起章第二にとりあげられている。
- (7) 興福寺は藤原氏の氏寺ではあるが、さらに官寺として造営され(太田博太郎氏「南都七大寺の歴史と年表」一四四頁)、げんに南都七大寺の中にも入っているのです、ここで一緒に取りあげることにした。
- (8) 黒沢幸三博士 古代小童譚の一形態——靈異記の道場法師——(「伝統と現代」第三十八号) 八七頁
- (9) 拙著 日本靈異記の研究 一〇八頁
- (10) 小泉道氏 伊予の説話資料の研究 五五頁
- (11) 井上薫博士 南都六宗と民間仏教(「アジア仏教史 日本編1 飛鳥・奈良仏教所収) 二五六頁
- (12) 拙著 前掲書 一六一頁
- (13) 井上薫博士 前掲論文 二五六頁
- (14) 直木孝次郎博士 靈異記に見える「堂」について(「続日本紀研究」第七巻第十二号) 一六頁

「古代文学」総目録

16号(昭和五十二年三月三十一日発行)	……菅野	雅雄	黄泉国と根国—死後世界の構造—	……三浦	佑之
「記序」偽撰説批判覚書	……森	淳司	古代における死と文学・非業の死	……露木	悟義
万葉集巻十一・十二	……加藤	静雄	—靈異記の場合—	……町方	和夫
—序詞の発想と民謡性とに関連して—	……辰巳	正明	死を託する歌—「過ぎにし(人)」—	……針原	孝之
巻十四と巻二十のあいだ	……渡部	和雄	古代における死と文学—家持の屈折—	……森	朝男
「士」憶良の論—士の不遇によせて—	……森	淳司	14号(昭和五十年三月三十一日発行)	……林田	正男
動物の発見	……戸谷	高明	人麿長歌における(「神話」と抒情	……高野	正美
15号(昭和五十一年三月三十一日発行)	……有木	節子	初期万葉と筑紫	……渡部	和雄
万葉集中の人麻呂歌集の書式	……古橋	信孝	万葉集巻七行旅歌群—制作時期をめぐって—	……高野	正美
—巻十・七夕歌群の用字の特殊性について—	……信孝	信孝	もう一つの「東歌を疑う」	……高野	正美
「天離る鄙」の意味	……信孝	信孝	—妹が門いや遠そきぬ筑波山—の在り様	……高野	正美
家持の孤独の認識論的研究・序論(比較論的に)	……信孝	信孝	夏期セミナー発表要旨	……高野	正美
物語の発生についてのひとつの覚書	……信孝	信孝	古万葉の形成	……高野	正美
—大嘗祭の古詞を中心として—	……信孝	信孝	巻十七—二十の成立	……高野	正美
夏期セミナー発表要旨	……信孝	信孝	小子の跡—日本靈異記上巻第三縁小考—	……高野	正美